



令和6年度 (2024年度)

グローバルワーク キャンプ報告書

with 多文化共創ボランティア・
ラーニング・プログラム

LET'S CONNECT!

一步を踏み出して、ボランティアに触れ合おう!

開催期間 令和7年 (2025年) 3月6日 (木) ~ 8日 (土)

開催場所 国立阿蘇青少年交流の家



(熊本学園大学陸上競技部のみなさんと一緒に記念撮影)

主催：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

協力：熊本大学、熊本学園大学東アジア共生文化センター、
日本文理大学人間力育成センター

※ 一般財団法人三菱みらい育成財団の「21世紀型 教養教育プログラム」事業助成を受けて開催しました。

Index

1Pグローバルワークキャンプとは、概要、スケジュール
2P開会式、基調講演、多文化共生社会の現状
3Pホームルーム活動報告 グループA グループB
4Pホームルーム活動報告 グループC グループD
5Pホームルーム活動報告 グループE、全体交流会、ちょっとひと息（食事タイム）
6Pスピーカーセッション ちょっとひと息（朝と夕べのつどい）
7P ... スピーカーセッション（A.S.の活動から考える多文化共生）新宅 彩加（自分の学びからみんなの学びへ）丹下 紗希
.....（グローバルワークキャンプでの学び）スミス トリニティ グレース
8P ... スピーカーセッション（ボランティアのすすめ）大窪 里桜（外国人だからできる日本人のインドでの活動）福岡 洸太郎
9P スピーカーセッション（持続可能な農村づくりとローカルフェアトレード）秋寄 歩美（熊本学園大学）
.....（2024年度フェアトレード研究会韓国研修報告書）原口 舞桜（熊本学園大学）
.....（人間力育成センターの活動報告を終えて）利光 豪貴（日本文理大学）
10Pアウトプットパネルディスカッション ～ 参加者の感想（グローバルワークキャンプを終えて）

※本書中、グローバルワークキャンプを**グロキャン**と記載します。

■ グロキャンとは

グロキャンは、大学生・高校生など若い世代のグローバルシチズンシップを育むことを目的に学生が主体的に企画運営する宿泊型のワークキャンプです。地域で多様な人と人をつなぎ、一人ひとりが活躍できる多文化共創社会を推進します。

グロキャンは、平成25年（2013年）当時グローバル化が進展、アジア諸国の成長で世界全体の社会構造が変化中、未来を担う若い世代が集い交流を図りながら共生社会を構築していくための自己の存在認識と可能性を発見することを目的に始めました。令和元年（2019年）まで7回を開催しましたが、その後新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止が続きました。今、行動制限が緩和され、人口減少・超高齢社会を迎えた国内では働き手として外国人の受け入れが本格的に再開されました。グローバル化が身近な地域での外国人住民の増加と多文化共生地域づくりの必要性として加速し始めています。

そこで、学生が、外国人や子どもなど多様な人たちと共に行動する社会実践活動をとらえて、今後の多文化共生地域づくりを考えることを目的に、令和7年（2025年）3月6日から2泊3日でグローバルワークキャンプを改めて開催することになりました。社会全体のウェルビーイングを実現するために、多様な人たちが自由に交流し共に学び、一人ひとりが活躍できる多文化共創社会を担う若い世代が育っていくことを期待します。

■ 概要

開催期間	令和7年（2025年）3月6日（木）～8日（土）
開催場所	国立阿蘇青少年交流の家（熊本県阿蘇市一の宮町宮地 6029 - 1）
参加者	29人
参加費	3000円
主催	一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
協力	熊本大学、熊本学園大学東アジア共生文化センター、日本文理大学人間力育成センター
助成	一般財団法人三菱みらい育成財団

スケジュール

	3月6日（木）DAY1	3月7日（金）DAY2	3月8日（土）DAY3
午 前	熊本は熊本市国際交流会館から出発（専用バス） 大分は日本文理大学から出発（専用バス）	06:30 起床 ～ クリーンタイム 07:15 朝のつどい 07:30 朝食（レストラン）	06:30 起床 ～ クリーンタイム 07:15 朝のつどい 07:30 朝食（レストラン） ～ 退所点検
	11:30 国立阿蘇青少年交流の家到着、入所オリエンテーション	09:00 スピーカーセッション①～④ 12:00 昼食（レストラン）	09:00 アウトプットパネルディスカッション
	12:00 昼食（弁当）	13:00 スピーカーセッション⑤～⑧	11:00 プログラム総評 申明直（熊本学園大学東アジア共生文化センター） 閉会式
	13:00 開会式	17:00 夕飯のつどい 17:30 夕食（レストラン）	12:00 昼食（レストラン）後、退所（専用バス） ※熊本からの参加者は阿蘇神社視察後、熊本市内へ移動
	13:15 基調講演 高見大介（日本文理大学人間力育成センター）	19:00 ホームルーム活動（テーマ：多文化共生） 21:00 入浴 ～ 就寝	夕方 熊本市国際交流会館、日本文理大学に帰着後、解散
	14:20 多文化共生社会の現状（情報提供）		
	14:50 シーツ配給 / 宿泊室へ		
	15:00 ホームルーム活動（テーマ：ボランティア活動）		
	17:00 夕飯のつどい		
	17:30 夕食（レストラン）		
	19:00 交流会（ソフトバレーボール）		
	21:00 入浴 ～ 就寝		

■ 開会式・ 基調講演



基調講演「ボランティアから生まれる人間力」

高見 大介（日本文理大学人間力育成センター）

2泊3日間のグロキャンを有意義に過ごしてもらうキーワードに「ボランティア」がありました。地域社会で自ら実践活動を行う時、人と人のつながりが重要になります。その時、求められる「人間力」について、日本文理大学の高見大介人間力育成センター長にお話しいただきました。



■ 基調講演報告（報告者 内田 翔空（とあ） 日本文理大学1年）

私は高見先生の話聞いて、ボランティアの重要性とボランティアとは何かを知ることができました。ボランティアとは愛ではなく心の距離であり、最初はボランティアとしてやっていたことも心の距離によって変化する、発散的解消があると分かりました。また、ボランティアという言葉が時代とともに成長し変化した言葉であることも知ることができました。ボランティアは無償で行うことですが、労働をすることにより知識や経験を得ることができる活動であるとも感じました。私は今回の話から、ボランティアを行う際に誰もが「助けて」と言えるような環境や地域になるように頑張っていこうと思いました。そのためには、多くコミュニケーションをとることや、笑顔で接することなどが重要になると考えました。これからいろいろなボランティア活動に参加していきながら、多くの経験や知識を積み、社会貢献をしていきます。そして、自分自身も成長していき、学生ボランティアの魅力の1つである、20年後の未来をつくることや、様々な分野に広がるようにしていきたいです。また、ボランティアの重要性を知るために高見先生の紹介した映画「ペイ・フォワード」を観て、ギブ&テイクのサイクルについても考えます。

多文化共生社会の現状（情報提供）

グロキャンのもう一つの重要な活動分野は、外国人住民と地域の多文化共生です。多文化共生社会の現状について、熊本市国際交流振興事業団の八木浩光常務理事に情報提供をいただきました。

■ 多文化共生社会の現状

多文化共生とは、2006年の総務省の地域の多文化共生推進プランで、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されました。外国人との言葉や文化・習慣の違いを理解し認め合うだけでなく、どうしても相容れない違いがある時もバランスをとりながら共に地域をつくっていくことが大切です。

日本の外国人住民数は、令和6年（2024年）6月現在で3,588,956人となり、25年で200万人が増加しています。特に、新型コロナウイルス感染症の行動制限が緩和されたここ数年、毎年外国人住民数が30万人増加、一方総人口が50万人減少しています。人口減は1年で中核都市が消滅する勢です。超高齢社会が進展する中、外国人の労働力なしに経済を維持することができません。また、自然災害が多発・甚大化する傾向があり、外国人住民は地域を支える担い手と考えられます。このためには、多文化共生社会の地域づくりを推進していかなければなりません。しかしながら、外国人側の課題に加えて、地域側にも異なる事への畏怖、多言語コミュニケーションへの不安、ストック情報の違いによる誤解、先入観などの課題があります。

このような現状を改めて検証しグロキャンが提案する「多文化共創社会」をつくっていくために、次の点から多文化共生社会の未来を考えたい。

- ▶ グローバルコミュニケーション：言葉、文化・習慣の違いを相互理解へ変える方法
- ▶ 異文化理解：自己のアンコンシャスバイアスを認め、自問する想像力
- ▶ ボランティア学習：社会のために自由に活動し、他者と必要としあえる関係づくり

ホームルーム活動報告

ホームルームは、グロキャンのコアになる活動です。異なる学校の学生が進む専門分野の枠を超え小グループに分かれて、「ボランティア」(1日目)と「多文化共生」(2日目)について「ジブンゴト」として考え、仲間と話し合い共有しながら、ホームルーム毎にまとめたことをアウトプットパネルディスカッションで発表し、全体で振り返りました。

■ グループA

(リーダー・報告者：亀田凜 (熊本大学1年)、塚本夏生 (熊本大学2年))

私達の班では、一日目のテーマであったボランティアを連想ゲームのように模造紙に書き、それぞれイメージを膨らませて吹き出しで書いていってから問題に関わりそうな吹き出しを別の色で囲みました。問題にいきなり対面して、ひとつの答えを考える形で進めると答えは出にくく、グループディスカッションも滞ると考えたため、このような形をとり、全員の考えを等しく発展させてから、答えに関わりそうな部分を抜き取り、解答を作っていました。しかし吹き出しを増やす場面でも、発想力には個人差があります。そこで、ファシリテーターが吹き出しの少ない班員に疑問を投げかけ、それに答えてもらう事で全員等しく発想を広げていきました。この問答法をとったディスカッションは、全員がある程度考えを持っている上にそれを可視化出来ていたため、会話に入れていない班員を取り残さず全員で考えることができるため、効果的だったと思います。



私達の班では、2日目も一日目と同様に模造紙に連想ゲームのように吹き出しを広げていき、解答に必要な部分を別の色で囲むことで答えを導きました。一日目と異なる点は、より全員が積極的に話し合ったことだと思います。一日目の初めに共通点探しをしましたが、見つからなかったためボランティアに関する問いの答えを出したあとに共通点を探しました。そのため、お互いの考え方を知ることが出来、一日目より自分から発言することのハードルが下がったと考えます。2日目のテーマは多文化共生でしたが、初めに多文化共生の定義を確認した後に考えを広げていきました。その際、行き詰まった班員のサポートをするべく、一日目と同様にファシリテーターが問答法を用いました。また、2日目は様々な視点がある中でも、同じ言葉が吹き出しに書かれていた際に班員同士で繋げました。一日目に自分で考えを発展させてそれについて話し合ったのとは対照的に、2日目は話し合いながら考えを発展させていました。

■ グループB

(リーダー・報告者：馬場琴海 (九州ルーテル学院大学1年)、吉田かの (九州ルーテル学院大学1年))

1日目のホームルーム活動で、私たちは簡単な自己紹介をしてお互いの共通点を探しながら緊張を解いていきました。それぞれの好みの音楽のジャンル、得意科目、将来の夢が違う中、みんな焼き芋が共通して好きだということが自己紹介を通して発見できました。次にボランティアに関する話し合いでは、高見大介先生の講演も参考に自分にとってボランティアとは何かということを考え全員で意見を出し合いました。そして私たちが考えた理想とするボランティアも『子供とより多く関わりたい』、『海外サポートに参加したい』、『地域交流・持続性を大切にしたい』という声が上がりました。私たちの班は年齢も少しばらつきがあり、大学で専攻している分野も違い興味関心事も一人一人違ったので多様な視点から議題を考えることができました。意外にもみんなが考えていることをたくさん発見してくれて話し合いが円滑に進む場面も多かったと感じています。



2日目のスピーカーセッションでは、私たちの知らなかった活動やスピーカーの伝えたかった話をグループ内でどう感じたかを話し合い、質問も積極的に行い、疑問に思うことを話し合いの中で私たちの考えの範囲内で解決していくことも大切だと考えました。ホームルームでは、多文化共生について、私たちは多文化と共生に関する二つに分けてそれぞれの根本的な意味から考えることから始めました。多文化共生の意味を理解した上で大まかなイメージのもと意見を出すことで、より多文化共生への理解を深め、ジャンルを広げて考えることができました。ワークシートの質問を元に、一人一人の経験や体験談を共有し、どのようなものかをグループ内で共有することが多かったように感じます。意見に共感することはもちろんですが、理が通って無かったり、こういう場合はそうとは言えないんじゃないかと言った考え直す意見や助言をお互いに行うことができました。最後に、福岡さんからのアドバイスとして、ジャンルを絞るほど視野が狭まるということも今後参考にしようと思いました。

■ グループC

(リーダー・報告者：松尾怜南 (九州ルーテル学院大学1年)、新宅彩加 (熊本大学2年))

1日目は、最初にグループを作り、お互いの信頼関係を作るために、自己紹介だけでなく、自分の好きな食べ物、出身地自慢、お互いの共通点など、自分のことをメンバーに伝え、メンバーの事も深く知る事が出来るような雰囲気と機会作りを行いました。また、私たちのCグループでは、1日目から、ボランティアと多様性について、質問を参考にしながら、何度も議論を行い、より私たちのグループのアイデアを他の参加者の方々に伝える事が出来るように、ポスター作りを行いました。私はホームルームリーダーとして、Cグループのメンバー達がより団結し、より良い発表を行なうために、何よりもメンバーが自分の意見を堂々と伝える事とメンバーそれぞれの個性を生かす事が出来るように気を配りました。メンバーそれぞれの性格に合わせて、発表する部分や役割を決め、常に自信を持てるように声かけを行ったりと、メンバーが無理せず、最大限の力を発揮できるように、寄り添う事を重視して活動を行いました。



2日目のホームルームでは、1日目で出し合った意見や考えを模造紙にまとめ、発表の準備を行いました。1日目に比べて、メンバー同士の仲も深まり、一人一人が発言しやすい良い雰囲気で活動ができたのではないかと思います。話し合いでは、それぞれがこれまでに多文化共生などについて体験してきたことや思っていることを出し合いました。1人で考えるだけでは思いつかなかったアイデアや新たな視点を見つけることができ、グループで活動する良さを改めて感じました。話し合いの途中では意見をまとめることが難しく、苦戦することもありましたが、音楽を流してみたり、お菓子を食べるなどしながら、リラックスして楽しく活動することを大切にしていました。それぞれの意見をキーワードとして書き出してみることで、みんなの意見の共通点が見つかり、グループの意見としてまとめ上げていくことができました。とても充実した活動ができたのではないかと思います。

■ グループD

(リーダー・報告者：鳩野汐音 (熊本県立大学1年)、緒方桂太郎 (熊本県立大学1年))

1日目のホームルームでの活動について、その内容とホームルーム委員として得た所感について詳しく述べたいと思います。

まずアイスブレイクに関してですが、私たちはワードワルフというゲームを採用しました。特にこれといった理由はなく、思いついたのがこのゲームだったに過ぎませんが、改めて考えてみるとこのゲームは会話が主であり、最初の緊張を解くのに最も良い方法の一つであったようにも感じます。次にボランティアに関する話し合いについてです。これは本番前の研修で学んでいた方法でもありますが、私たちのグループでは配られていた模造紙に思いつくアイデアをとことん書いていくような方法を採用しました。やはり個人的にグループ活動でもっとも困る場面は考えがなかなか出ない時だと思うので、まずは重複があってもいいのでできるだけ考えを出してもらおうような雰囲気作りを意識しました。また私たちのグループには中国の参加者がおり、外国人の視点からも考えを聞くことが出来たことが意見の活性化に大きくつながったと感じます。以上が一日目のホームルームにおける大まかな活動内容と所感です。



2日目の活動はスピーカーセッションと2回目のホームルーム活動を行いました。スピーカーセッションでは8つの発表が行われました。学生から大人と、幅広い年代の方の発表を聞くことができたので、良い経験になりました。各発表後にはスピーカーの発表に対してグループになってディスカッションを行い、質問や感想を発言しました。質問や感想という形でスピーカー以外の方も非常に意欲的で多くの感想や質問が寄せられていたので双方に有益な意見交換ができ、良い情報共有の場になったと思います。また、2回目のホームルーム活動では多文化共生について話し合い、最終日の発表に向けてのまとめまで作成しました。一回目のホームルーム活動でのアイスブレイクで緊張をうまく解すことができたので円滑に話し合いを進めることができました。今回のキャンプでは全体を通して班での活動が主であったため、グループ内の人と特に交流を深めることができました。

■ グループE

(リーダー・報告者：瀬川爽太 (熊本県立大学1年)、井口ひなた (熊本県立大学1年))

1日目は、最初グループが分かれたばかりの時は皆ほとんど初対面で緊張していました。その緊張をほぐすために、「はあって言うゲーム」を皆でしました。このゲームは演技が必要になるゲームでお互い恥ずかしがりながらでしたが、心を開いていくのに役立ったと感じています。私たちEグループは付箋に自分の質問の答えや思いついていくものを挙げていきました。自分の思考を書いていくことでみんなの目に触れ、言いたいことが周りに伝わりお互いに質問し合っグループの意見をより良くしていくことができました。グループには国籍・大学・専攻・経験がバラバラな人が集まっていたため、思考回路が違っていたりして体験したことのないボランティアの話なども聞くことができました。ボランティアに必要なことなどを考えていく上で、それぞれの経験から出される意見に刺激を受け、話し合いが活性化したように感じます。講師の方などとも話して、話し合いが深まりました。



2日目の、ホームルームでは1日目と比べて仲良くなったおかげで笑いが多かったです。また1日目の運営の振り返りにおいて、音楽を流していたグループがあったということで2日目のホームルームでは音楽を流しながら進めていった。そのお陰なのかスムーズに進んでいったと思う。このグループでは、それぞれの問いに自分なりに付箋にかけただけ書いていって、一つずつ見ていくという方式をとった。多文化共生についての話し合いは1日目のボランティアに比べてまとめにくかったと考える。というのも多文化共生と感じた経験がなかったという理由からだ。ホームルームメンバーは大学で留学生と関わる機会がないとっていて、海外にもいったことがないようだった。しかし道案内はしたことがあるとっていたので、その時の言語や服装に注目して話を進めていった。加えてメンバーに文化社会出身の留学生の方がいたので、彼女の経験からくる意見なども共有することができた。

■ 全体交流会 ソフトバレーボール

1日目の夜、全体交流会を開催しました。体育館で、ソフトバレーボールを楽しみました。目一杯、体を動かし、楽しく交流することで、参加学生全体の友情を広げることができました。2日目のスピーカーセッションホームルームで、自由にそれぞれの意見や感想を出し合える関係を育むことができました。



ちょっとひと息(食事タイム)

阿蘇青少年交流の家のレストラン「輝・来・来(きらら)」では、阿蘇、熊本の食材を使った食事がバイキング形式で提供されます。阿蘇の大自然を一望しながら、みんなで楽しく、美味しくいただきました。



スピーカーセッション報告

2日目は、学生やNPO活動者が行っている社会実践活動を発表してもらいました。各発表の後、ホームルームグループ毎の小さなグループで発表された実践活動について考察や感想を話し合い、全体で情報交換、共有をしました。今後、各学生の学校での学びを深め、社会でのボランティア活動に発展していくことでしょう。スピーカーセッションの発表は次のとおりです。

- スピーカーセッション① (A.S.の活動から考える多文化共生) 新宅 彩加 (熊本大学A.S.)
- スピーカーセッション② (自分の学びからみんなの学びへ) 丹下 紗希 (熊本大学教育学部)
- スピーカーセッション③ (グローバルワークキャンプでの学び)
スミス トリニティ グレース (早稲田大学グローバルリーダーフェロシッププログラム)
- スピーカーセッション④ (ボランティアのすすめ) 大窪 里桜 (JICA海外協力隊グローバルプログラム生)
- スピーカーセッション⑤ (外国人だからできる日本人のインドでの活動) 福岡 洸太郎 (NPO法人結び手)
- スピーカーセッション⑥ (持続可能な農村づくりとローカルフェアトレード)
秋寄 歩美 (熊本学園大学大学院東アジア共生文化センター)
- スピーカーセッション⑦ (2024年度フェアトレード研究会韓国研修報告)
原口 舞桜 (熊本学園大学フェアトレード研究会)
- スピーカーセッション⑧ (人間力育成センターの活動報告を終えて) 利光 豪貴 (日本文理大学人間力育成センター)



3日間の全体セッションの司会進行を担当した亀田 凜さん (熊本大学1年) (左側) と瀬川 爽太さん (熊本県立大学1年) (右側)



ちょっとひと息(朝と夕べのつどい)

阿蘇青少年交流の家では、朝7:15から朝のつどい、また夕方17:00から夕べのつどいがあります。グローキョウ期間中は天候に恵まれて、所前の広場で開催されました。朝のつどいでは、国旗と所旗の掲揚とラジオ体操があります。団体を自己紹介する時間もあります。入所、活動している団体とお互いに知り合う時間です。阿蘇の冷気の中、身が引き締まる1日の始まりです。



■ スピーカーセッション① (A.S.の活動から考える多文化共生)

新宅 彩加 (熊本大学A.S.)

私は、熊本の日本人と外国人を繋ぐ国際交流イベントを作る熊本大学学生団体A.S. (アズ) の代表をしております。今回のグローバルワークキャンプでは、特にA.S. が熊本大学にて行ったイベントを通して気づいた、熊本大学における国際交流と多文化共生の現状、問題、解決策についてご説明させていただきました。国際交流や多文化共生という話題は、外国人と関わる機会が少ない日本人学生の皆様にとって、想像しにくい話題である可能性が高いと考えました。その為、想像しやすいように、写真を多く使った資料を用意し、国際交流や多文化共生の現状や問題点に焦点を置き、参加者の皆様と一緒に考える事が出来るように、発表の工夫を行いました。発表の中で、私は「日本人と外国人はお互いの存在を恐れており、お互いに言語や文化、考え方の違いを知る努力を行う事が出来ておらず、両者の間には見えない大きな壁が存在する」と問題点を発表しました。すると、質問や感想を発表するコーナーにて、沢山の参加者が手を上げ、問題点に関する具体例や解決策について興味を持って下さり、一緒に考えて下さり、私にとっても非常に勉強になりました。多くの方が挙げてくださった解決策の中で特に、「英語や日本語が苦手な方々に向けて、安心できるシステムを作る」「単発のイベントではなく、長い関係を作る事が出来るイベント作り」等、頂いた貴重な意見を活かしながら、熊本の国際交流と多文化共生を実現する事が出来るように努力します。



● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

15カ国の留学生と一緒にいった「KOKAIフリーマーケット」が特に印象的であった。熊本学園大学が行っているローカル・フェアトレード・マルシェとともにマーケットを進めると良さそうである。さらに、熊本学園大学が主催した東アジア共生映画祭の字幕翻訳に、熊本大学留学生たちが一緒に参加するのもよさそうである。

■ スピーカーセッション② (自分の学びからみんなの学びへ)

丹下 紗希 (熊本大学教育学部)

発表を通して、自分の学びや経験を自分だけのものではなく、参加者の皆さんに共有できたことを嬉しく思います。今回のグローバルワークキャンプで多文化共生・ボランティアについて学ぶ機会がありましたが、相手のことを「知る」こと、世の中の現状を「知る」ことはすごく大切だと思います。そして、「知る」だけでなく、それを共有し、輪を広げることも同様に大切だと、この発表を通して実感しました。今回私がお話ししたカンボジアやシンガポールの学びは、多くの方との出会いの中で得たものです。学びを活かすということはどういうことなのか考える日々でしたが、学びを、今回の参加者の皆さんに繋げることもその1つだと感じました。学びを活かす方法は一つではないと思います。自分の学びを他者と共有し、共に成長できる環境を作ること、少しでもより良い未来、社会に貢献できると信じています。これからも出会いや経験を大切に、学び続け、その学びを広げることができるよう尽力していきます。



● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

カンボジア平和教育と日本平和教育の比較検討が特に印象的であった。しかし、カンボジア人は海の向こう側だけにいるのではなく、熊本の農村にも多い。東アジアの平和は、熊本の農村における多文化共生の中で実現することも可能である。

■ スピーカーセッション③ (グローバルワークキャンプでの学び)

スミス トリニティ グレース (早稲田大学グローバルリーダーフェローシッププログラム)

なぜ、熊本県阿蘇でのグローバルワークキャンプに参加したのかというと、都会から離れて日本人と文化交流ができる良い機会だと思ったからです。そして、将来CIR (国際交流員) を目指す私にとって大変有意義な経験となりました。

多文化共生をテーマに、地元から集まった参加者と意見を交わす中で、それぞれが取り組んでいるボランティア活動や地域貢献の発表を聞くことができ、自分の視野を広げることができました。環境問題や外国住民の移民支援など、普段の生活ではあまり触れることのないテーマについても、新しい視点から考え直すきっかけになりました。

また、日本社会が抱える過疎化や高齢化といった課題について、地元の方々と直接話し合う機会があったことも印象的でした。現場の声に触れることで、単なる知識としてではなく、より実感をもって日本の課題を理解することができました。

さらに、スピーカーとして自分の考えを発表する経験も得ることができました。発表はまだあまり得意ではありませんが、人前で話す機会を重ねる中で、プレゼンテーション能力に少し自信がついてきたように感じます。これはCIRとして必要なスキルであるだけでなく、日常生活や将来の仕事でも役立つ力です。

今回のキャンプで得た経験や学びを、今後さまざまな場面で活かしていきたいと思います。このような機会をいただき心から感謝申し上げます。

● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

神社参拝のような宗教関連の事案が多文化の領域に入るのかに関する質問があったが、このような問題と関連しては慎重に接近する必要がある。特定国家の場合、植民地時代の強制参拝を思い浮かべることがありうるからである。



■ スピーカーセッション④ (ボランティアのすすめ)

大窪 里桜 (JICA海外協力隊グローバルプログラム生)

伝えたかったことは大きく二つです。一つ目は、興味はあるもののボランティアへの一歩を踏み出せていない人へ「どうやってボランティアの情報を手に入れて活動を始めるか」ということです。プログラム終了後、発表中に紹介したサイトやメーリングリストのURL*をグループラインに送ったので、実際にページを見たり登録したりしてみた人がいたら嬉しいです。

もう一つは、「大変なことやモヤモヤすることも色々あるけれど、結局はどれも良い経験で素晴らしい出会いがあり、きっとやってよかったと思える！」ということです。モヤモヤに共感してくださる学生の方が複数いて、皆同じような思いを抱えているのだと分かりました。ただ、どうしたら解決できるかという議論が深くできなかったのは反省点です。発表を聞いた皆さんが、それぞれに受け取り、考えていただけたら嬉しいです。

今後はボランティアをするなかで感じる不満や困難をどうしたら解決できるか、自分なりに考えたいと思います。また発表準備や皆さまから頂いたご質問が、ボランティアの意義や価値を再考する良い機会となりました。これから2年間、JICA海外協力隊としてボランティアに従事する身として、目の前の仕事に必死になることもあるとは思いますが、心に留めておきたいと思いました。

*参考URL：

JICA PARTNER



<https://partner.jica.go.jp>

国連フォーラム
United Nations Forum



<https://unforum.org>

ボランティアプラットフォーム



<https://volunteer-platform.org>

アクティボ



<https://activo.jp>



■ スピーカーセッション⑤ (外国人だからできる日本人のインドでの活動)

福岡 洸太郎 (NPO法人結び手)

NPO法人結び手は「外部環境が原因で努力できない人をゼロにする」という理念のもと、インドにて教育支援・女性自立支援に取り組んでいます。熊本のグローバルワークキャンプでは、代表理事の福岡が「世界25カ国を旅して目撃した現実と、インドで向き合っている課題と具体的な解決への取り組み」をお話ししました。

インドの貧困地域では、教育も医療も届かず「不可触民」と言われている人がいます。私たちはこの状況を打破するため、村やスラムの1,570名の子どもたちへの基礎教育、女性向けの自立支援を展開しています。

「生まれた場所に関わらずせめて努力する機会だけは全人類が手にする」。現地の課題を肌で感じながら、ご支援・ご協力をお願いいただけると幸いです。



お問い合わせ・ご参加は：info@musubite.org

https://www.instagram.com/npo_musubite/



<https://www.youtube.com/@musubitechanelnpo757>



● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

きのご栽培と縫製訓練などが特に印象的であった。自立支援活動が持続可能であるためには、フェアトレードのようなソーシャル・ビジネスとしての成功が必要であると思う。

■ スピーカーセッション⑥ (持続可能な農村づくりとローカルフェアトレード) 秋寄 歩美 (熊本学園大学大学院東アジア共生文化センター)

2023年9月から熊本学園大学フェアトレード研究会とNPO東アジア共生文化センターなどが共同で進めてきた、ローカルフェアトレードによる「持続可能な多文化共生熊本づくり」プロジェクトについて紹介した。

紹介した内容は大きく4つある。一つ目は、熊本県内の農業移住労働者たちが働く「多文化共生農家」と「エスニック・SDGsショップ」を結ぶため、熊本県の支援を受け2023年9月から10月にかけて行った、多文化農家とエスニック/SDGsショップの調査である。二つ目は、2023年10月から2024年2月にかけて熊本学園大学フェアトレード研究会の学生や熊本市国際交流振興事業団などが実施した、熊本のエスニックショップや多文化農家に関する調査である。三つ目は、「多文化共生農家」や「エスニック・SDGsショップ」の調査結果を基に、HP等を用いた連携システムの構築につながるために行った、ローカルフェアトレード認証に関するガイドライン作成のための討論会についてである。四つ目は、2024年10月27日と12月22日に行った「ローカルフェアトレードマルシェ」についてである。多文化共生農産品の販売や多言語挨拶スタンプラリーの取り組みについて紹介した。



■ スピーカーセッション⑦ (2024年度フェアトレード研究会韓国研修報告書) 原口 舞桜 (熊本学園大学フェアトレード研究会)

1日目は、TREN-BI FARM 農園を見学した。ここでは境界線知能人をテーマとし、青少年の自立を促す場所である。サトウキビ、モリンガなど多くの作物を栽培しており、またフェアトレード商品の一つであるコヤンコーヒーを栽培し、フェアトレード活動も行っていった。

2日目は、ヨジュ市FT(フェアトレード)フォーラムへ参加した。公正な生産条件の提供と論理的消費を追求するフェアトレードの概念を、地域流通・消費生活に適用したローカルフェアトレード、および持続可能なヨジュ市地域経済の活性化案について議論された。午後は、プルメ・ソーシャルファームを見学した。ここでは発達障害者のための農場で、55人の発達障害者が働いている。農作物の栽培だけでなく、学習のための教育文化センターも設けられていた。施設内にあるカフェにも訪れ、パンやドリンクをいただいた。

3日目は、光明市庁舎の社会的経済課を訪れ、光明市が行っているフェアトレードの取り組みについて話を伺った。フェアトレードの啓発として、大衆に関心を持ってもらうために祭りを開催したり、フェアトレード産品を入れたボックスを持って学校を訪ねて授業をしたり、ユニーク且つ効果的な広報活動が行われていた。午後は、光明市青少年修練館へ移動し、青少年が運営しているカフェ「プルダ」を訪れた。スタッフの方々と共に美味しいコーヒーを楽しみながら親睦を深めることができた。



● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

児童労働を解決するためにグローバル・フェアトレードを始めたが、発展途上国の人々は海外だけでなく国内に多く入ってきて移住労働者として仕事をしている。彼らが生産した製品/農産品を通じて、彼らの自立・自活を図ろうとしたのがローカルフェアトレードといえる。

■ スピーカーセッション⑧ (人間力育成センターの活動報告を終えて) 利光 豪貴 (日本文理大学人間力育成センター)

私は、日本文理大学の人間力育成センターでの様々な取り組み事例を、各プロジェクトメンバーを代表してグローバルワークキャンプの参加者に報告しました。このスピーカセッションを経験して大きな心の変化があったのでそれをお話します。当初は各プロジェクトの取り組みを通して、子ども支援や環境の保護や地域・まちづくりを参加者に教えるイメージでいました。しかしこのスピーカセッションで報告後の意見交換や、グループでの討議において、様々な意見や見方を学ぶことが出来ました。それは自分たちの活動に精いっぱい、また疑いなく遂行していた自分たちにとっては、とても新鮮でありがたい出来事でした。これからの活動のヒントとなる意見や、コラボの話もありとても建設的で魅力的な時間でした。また、他団体の取り組みや考え方や、今まで知らなかった社会課題にも触れる事ができたことはとても勉強になりました。この集いで得たことは知識と仲間であると強く感じました。またこういった大学生の連携の場があったら参加したいです。



● コメント：申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

四季の森プロジェクトが特に印象的である。竹林伐採とNBU森を発展させているが、地域活性化プロジェクトなどと結合したソーシャル・ビジネスに成長していくと良いかもしれない。

アウトプットパネルディスカッション

最後の日の午前中は、ホームルーム活動のまとめであるアウトプットパネルディスカッション、閉会式を行った。各グループ、模造紙を使って活動成果を発表した。同じ問いで話を進めたのに、グループ毎にたどり着いた結論や意見が様々で大変興味深いものでした。みんなが真剣に聴き、意見交換をしました。それぞれの学びにつながりました。



■ 参加者の感想 (グローバルワークキャンプを終えて)

- ◇勉強をする時間が多く大変かなと思ってたけど、本当に楽しい時間でした。
- ◇みんなが気軽に参加し、ボランティアや多文化共生について学ぶことができた。
- ◇ホームルームなどのディスカッションは新しい視点を持つことができた。
- ◇色々な活動について詳しく知ることができてとても興味深かった。貴重な体験だった。
- ◇福岡さんの話が面白かった。
- ◇問題なども起こらず交流を深められた。
- ◇違う大学の人と話し合ったり、バレーボールをすることで仲を深めることができた。
- ◇色々な人と関わる機会になってよかった。
- ◇色々な意見が飛びかったことが面白かった。
- ◇初めて大学生たちと議論し、自分たちの考えをまとめる機会だった。自主性や表現力を成長させることができました。また、このような活動に参加したいと思います。
- ◇完全に多文化共生とボランティアを理解できたとは言えませんが理解できる一歩を踏み出した合宿になりました。
- ◇他の人との出会いが一番印象深いです。またいつか出会えたらいいなと思います。
- ◇基調講演やスピーカーセッションを通して、自分の価値観や考えがアップデートされました。
- ◇今まで行っていたボランティア活動を見つめ直すきっかけになった。
- ◇行動力のある同世代の活動を知れて良い刺激になった。
- ◇多文化共生社会について深く考える機会は無かったので難しかったけど参考になった。
- ◇普段はボランティアについて深く考えることが多いが、多文化共生について新たに考えることができてもよかった。
- ◇新しい出会いもでき、とても新鮮な活動だった。
- ◇大部分が初対面の人で構成されていて、当然やって行けるか不安であったが何とか3日間仲良く過ごすことが出来た。
- ◇普段は体験できない国際交流や異文化との共生について考えるととても良い機会になった。この研修に携わってくれた方や運営してくれた方々に感謝したいです。
- ◇多文化共生やボランティアについて、グループ内や全体で考えたり、話すことができ良い経験になった。
- ◇それぞれの学校や個人の活動について知れて、興味深い活動や話があり、これからの自分の役に立つことができた。
- ◇他の大学で行われている活動の凄さを知ることになりました。
- ◇知らなかった知識や、みんなで交流をし、仲良くなれたことも良かった。
- ◇運営側も参加者も大人の方もみんなでたくさん話して、交流できたのがすごくよかった。なんとなく参加したけれど、今は参加してよかったと思います！
- ◇他の大学生との交流は自分にとって中々無かったのでどんな人達なのか緊張していたが、気さくな人が多くフレンドリーに振る舞えた。
- ◇プレゼンの内容はもちろんなこと、自分としてはプレゼンの仕方が大いに勉強になった。
- ◇普段関わることのない同世代の人と関わって、それぞれの話を聞くことで刺激になったし、ボランティアや多文化共生ってなんだらうと考える良い機会になりました。
- ◇海外の考え方もたくさん触れることができたし、とても有意義な時間を過ごすことができました。

■ 反省、今後期待したいこと

- ◇もっと基礎講演などの学ぶ時間が個人的にはあったらいいなと思った。
- ◇もっと真剣に活発に意見交換できればよかった。
- ◇もう少しメンバーと仲良くなれるイベントがあった方がいい。
- ◇事前に会議の日程などを言って頂けると当日スムーズに出来るのではないかな。
- ◇英語をメインに使うって参加するプログラムだと思っていましたが、内容的には全然違った。もう少し英語を取り入れるのが面白いと思った。
- ◇違うチーム編成で仲良くなる機会を複数設けると良い。
- ◇これからもっとボランティアや多文化共生について考えを深め、行動したい。
- ◇継続的なボランティアについて考えていきたい。
- ◇質疑応答の時、感想や質問を思い浮かべられるように、発表中にメモを取りと良い。集中力を維持できると思う。
- ◇今回学んだことを、これからの人生やボランティア活動で活かし頑張りたい。
- ◇こういったイベントが定期的にあるとまたたくさんの人と交流できて、考え方が広がる気がします。また機会があったら是非参加したいと思います！

■ 大変だった..

- ◇2日目が座学のプログラムばかりでキツかった。

■ 総評

申明直 (熊本学園大学東アジア共生文化センター理事長)

皆さんの今後の取り組みに向け、異文化理解と多文化共生について整理します。

多文化共生を実現するためには、まず異文化理解を通じた異文化コミュニケーションが必要である。その後、多文化共存、多文化共生、多文化共創の段階に移る。ローカル・フェアトレードは、多文化共創の段階といえる。地域の共同生産者として完全なメンバーシップを確保する段階であるからだ。

また、バンクーバーモデルとデトロイトモデルの2つの多文化モデルを紹介する。一つは排除モデルで、もう一つは包摂/包用モデルである。前者の代表的なケースはデトロイトモデルで、市内と郊外が完全に分離されている形である。後者の代表的なケースはバンクーバーモデルで、発展途上国出身の市民が地域の中で高い地位を獲得した人が多い。前者は市内をゲットー化(分離居住地域化)して治安が極めて不安定な形であるのに対し、後者は安全であるだけでなく平和な国際タウン化している。これら二つのうち、どのモデルを選ぶべきかは自明である。

以上、多文化共生に力を入れなければならない理由でもあります。



未来へ

“力を合わせて、さらに素晴らしい経験をつくっていきましょう！”

今回のグローキャンでは、参加者同士の活発な交流が見られ、2つのキーワード「ボランティア」と「多文化共生」について理解が深まったことが大きな成果でした。新型コロナウイルスの影響で中止が続いたグローキャンを復活できたことは大きな一歩でもありました。

次回に向けて、新学期早々から運営メンバーを募り、企画会議を重ねることで、グローキャン開催時（2026年3月開催予定）に、自信を持ってプログラム全体をコーディネートできるようにサポートしていきます。または、留学生の参加者を増やし、より多様性豊かなグローキャンにしたいと考えています。そして、今後、グローキャンをもっと学びに溢れ、自由に意見を共有できる交流の場として発展させていけるように学生運営メンバーと事務局で協力していきます。

アンケート結果を参考にしながら、プログラムを見直し、より多くの参加者が楽しんでもらえるよう、企画内容を充実させたいと考えています。これからも多くの皆さんに意見をいただき、積極的に取り入れながら、より良い活動を目指していきます。

マグダレナ ムジゴド（事務局）

令和6年度グローバルワークキャンプ学生運営委員

亀田 凜（熊本大学1年）

塚本 夏生（熊本大学2年）

馬場 琴海（九州ルーテル学院大学1年）

吉田 かの（九州ルーテル学院大学1年）

松尾 怜南（九州ルーテル学院大学1年）

新宅 彩加（熊本大学2年）*委員長

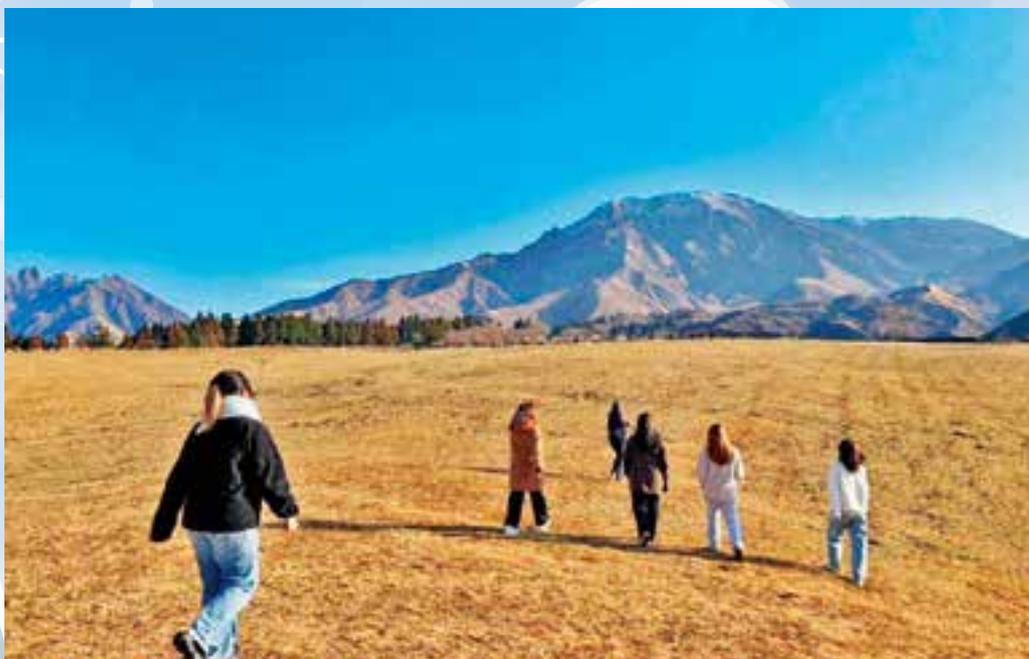
鳩野 汐音（熊本県立大学1年）

緒方桂太郎（熊本県立大学1年）

瀬川 爽太（熊本県立大学1年）

井口ひなた（熊本県立大学1年）

スミス トリニティ グレース（早稲田大学グローバルリーダーフェロシッププログラム）



【主催】 一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

【協力】 熊本大学、熊本学園大学東アジア共生文化センター、日本文理大学人間力育成センター

【助成】 一般財団法人三菱みらい育成財団

* 「21世紀型 教養教育プログラム」 事業助成



インスタグラム

global.work.camp.kumamoto